当日資料１

令和5年度 第１回医療連携推進部会（医療） 会議内容概要

と き	令和5年10月20日（水） 13：30～15：00
ところ	近江八幡市総合福祉センターひまわり館 2階研修室
出席者	櫃本会長、宮下委員、高田委員、磯矢委員、角野委員、引間委員、西川委員
欠席者	柴田委員、北村委員
傍聴者	なし
事務局	長寿福祉課
議事 事項	**○報告事項** （1）第8期総合介護計画 令和5年度在宅医療・介護連携推進事業の本市の取組状況について （2）排尿支援プロジェクト取組報告 **○審議事項** （1）第9期総合介護計画における取り組みの方向性について
内 容	**○報告事項** ＊令和5年度取組状況、排尿支援員養成講座実施状況について事務局より報告。 【主な意見等】 ・まずは自分自身の生活全体を振り返っていただき、自分らしい生き方について、ご自身なり周囲が明確にして、セルフケア意識のようなものを引き出していく。そのためのツールとして自分らしさ発見ノートを今後も普及していけるとよい。自分らしい生き方を明確にした上で、医療介護の専門性を、自らの意思で生かしていくということが必要。 ・医療介護体制を作っていくということについては、人手不足のある中で本人のセルフケア意識なり、住民や周りの支え合いということをある程度前提にしながら、その支援と合わせて医療介護専門職として支援する内容をより明確にしていく、効率的に行っていくということが求められている。 ・排泄のことについては、市民や専門職みんなが知って、当たり前に「困っているなら相談したらいい」という意識や、薬局に行ったら「こんなオムツがいい」等といったアドバイスがもらえるような環境が整ってくるとよいのではないか。 ・排泄については、オムツを少しでも外していったり、介護度を下げたりという専門性の高い話だけでなく、もう少し日常生活の中である程度頻尿を予防したりとか、せめてオムツの回数を減らしたりとか、その辺のサポートができる普及啓発をしていくことが必要。そうすることによって、より幅広く開業医なり看護師等の専門職も関われるだろう。 ・身体フレイル、口腔フレイル等、フレイル対策はもちろん進めていくが、いきいき百歳体操の中に骨盤底筋体操を組み込んでいく、頻尿や排尿の問題から、オムツ対策含めて、フレイル

	対策をトータル的に進めていくという考えはどうか。また、住民への直接アプローチとして市民への普及啓発をエンディングノートの普及とあわせて実施していく。 ・歯槽膿漏感染という考え方もあり、歯周病や歯が原因になり循環器病などいろいろな病気が起こりうるということがあるため、市内病院や介護施設等への口腔ケアに歯科医等が入っている。地域完結型で連携が進んできているというのは、近江八幡市の強み。今後は、歯科衛生士指導のもとでセルフケアがやれるようになっていけるとよいし、在宅におられる方はかかりつけ歯科医をもち、歯科医院に通っていただくとか、訪問診療を受けるという形も進めていく必要がある。今までのように病気予防というよりも、今後はむしろよりよく生きるためのウェルビーイングという形の中で進めていくということが望ましい。 ・自分らしく生活するというウェルビーイングのためのフレイル予防をいかに住民に伝えたり、エンディングノートとして普及したりしていくか。そう考えたときに、調剤薬局がコンビニよりも数があるということで薬局での総合展開が考えられる。薬局には医療者がいるという強み、そこに情報を集めるということが可能であるという強みがあるので拠点にできないか。排尿はものすごく大切だということを、ひどくならないうちから薬局が伝えていく等、セルフケアに対する支援策、それと早期の治療に繋げる役割は大きい。 **〇審議事項** ＊第９期総合介護計画における在宅医療介護連携事業の取組の方向性について、事務局より説明。 【主な意見等】 ・ACP（アドバンス・ケア・プランニング）や人生会議等は、生きていく責任として…とか、自分を振り返る上で…とか、自分が将来亡くなった後を考える…等といった点では大切なことではあるが、よりよく生きる、ウェルビーイングを考えたとき、今の60歳代、70歳代ぐらいの人たちが今から準備しておくことが大切。病気を前にしていないときには、ACP というよりもむしろ自分が自分らしく生きていくというウェルビーイングの中で記入できるツールがもう一つあればいい。 ・ウェルビーイングを考える上では、市民のセルフケア力を上げたり、それを意識した中での生活支援としてのアプローチが重要。疾病管理とか病気の予防といった課題解決というネガティブな発想よりも、こうありたいというウェルビーイングの中で、将来的にはかかりつけ医だとか、かかりつけ歯科医や薬局を皆さんが持って、専門家の支援を日常的に受けながらセルフケアをやっていくということができるような町になればよい。 ・高齢者や支援の必要な人を一方的に専門家・専門分野が支えることは無理。ウェルビーイングを実現するためには本人の意思が必要で、このあたりを含めた住民への啓発活動を行政関係者と医療介護関係者が組んでやっていかなければならない。

当日資料１

令和5年度 第１回医療連携推進部会（認知症） 会議内容概要

と き	令和5年11月2日（木） 16：00～17：30
ところ	近江八幡市水道事業所会議室
出席者	窪内会長、齋藤委員、谷川委員、宮本委員、川原﨑委員
欠席者	なし
傍聴者	なし
事務局	長寿福祉課
議事 事項	**〇報告事項** （1）近江八幡市認知症事業の実施状況について **〇審議事項** （1）近江八幡市認知症施策の方向性について
内 容	**〇報告事項** ＊近江八幡市認知症事業の実施状況（第 8 期）について事務局より報告 【主な意見等】 ・コロナ禍で行動が制限され、見守り体制ができなくなったことによって、心身機能、認知機能が全体的に低下された人が増えたという印象はある。 ・認知症自体を見ていて思うことは、活動範囲が狭まることによって認知症が進みやすくなるとか、逆に活動の場が与えられることによって悪化していた症状が軽快する例はいっぱいある。また認知症の人は状況理解が悪くなるので、活動を制限されること自体がとにかくすごいストレスになる。できるだけ活動の場を与えてあげるということが、認知症の進行というよりもその周辺症状の改善にすごく役立つということを実感している。認知症にとって活動の場を整えていくということがすごく重要だということを改めて感じている。 ・認知症疾患センターへの相談については、認知症かもしれないという時の第 1 選択肢として相談するには本人、家族さん自身がちょっとまだハードルが高いのではないかという印象を持っている。どちらかというと支援者さんとか包括の方から相談いただくケースが多い。相談窓口として周知が必要ではあるが、地域包括支援センターとの連携はとれているので、他の相談窓口と上手に連携が図れていけたらいいのではないかと考えている。 **〇審議事項** ＊第 9 期に向けた近江八幡市認知症施策の方向性（案）について事務局より説明。 【主な意見等】 ・認知症初期集中支援チームの検討ケースは、それなりの困り事になってから上がってくるが

	本来はもっと手前でやるべきと感じる。MCI や軽度認知症のレベルで相談しておけばハードルをもっと下げられるのにと思う。 ・認知症だけを取り上げるのではなく、高齢者を取り巻く環境、高齢者に起こってくる問題として連続的にみていければいいのではないか。高齢者が集える場があって、その中で活動や健診等をしていく中で、高齢者の機能低下や認知症などの問題を拾い上げていければよいのでは。そういう場をどう作り上げていくかを考えていけるとよいのではないか。 ・認知症の方や精神疾患と認知症の狭間のような方、もともと精神疾患があり、高齢になって認知機能が低下してきているという方などさまざまおられる。入院されている方で、精神状態も落ち着いているので退院できそうだが、介護保険申請しても要支援にすら該当しない、本人も不安が大きくて、自分の家はあるが帰れないという方もいる。障がいサービスや介護サービス以外で、もう少しこんなサービスがあれば帰れるのではないか、退院支援も進むのではないかと思うことはある。地域の支援を得るには個人情報があったりもして、介入もしづらくなっているというところも難しい。暮らし全体を支援してくれる包括的な支援、しくみがあるとよい。 ・認知症デイサービスで実施している認知症カフェは認知症の方限定ではなく、どちらかというと認知症の方がこうやって過ごしておられるというのを見て欲しい場として開けている。実際に来られると、一緒に体操や料理、手作業などをして、認知症の方のできることがたくさんあると実感されたり、職員と見間違ったなど、大きくイメージを変えて帰っていかれる。 ・認知症デイサービスに来られる方は初期の方が多くなってきている。家族が困っている最中にデイサービスに来られるより、初期の段階で家族の方々とも繋がれてすごくいいと思うが、今まで散歩を日課にしてた方が家に帰れなくなったからデイサービスに来られて、散歩の習慣がなくなってしまったり、他にもそれまでの習慣がなくなってしまうということがあると早く来られることがいいことばかりではないと感じる。地域の中でその人を見守りながらそれまでの暮らしが続けられるとよいが、地域の人たちが対応していくことに難しさもある。 ・認知症の人で同じ介護度を持っておられる方でも個々の性格だったり、できることできないことのレベルが違うので、介護保険に繋がったらOKなのかというのは確かにある。本人はデイサービスに行っても何もすることはないし、それなら家で家事がしたいとおっしゃるが、普段一緒に住んでおられる家族からしたら、日中独居になるので心配なので行ってほしいと言われる。本人の意向も大事にしたいが家族の方の気持ちもわかるので、ケアマネジャーとしてそこをどううまく取り込んでいくのかというところで、すごくジレンマがある。地域によっては、市民や民生委員さんがかなり支援くださっている一方で、民生委員さんすらおられない地域もある。そういったところをもう少しフラットに近江八幡市全体としてやっていくことも必要だと思う。 ・介護サービスを利用すると地域と切り離されている印象があるかもしれない。その人の暮らしを継続する中に認知症の治療や介護があるとよい。 ・地域の皆さんは認知症に興味を持っておられる。出前講座に行くと認知症の方への関わり方や認知症の予防、認知症になったらどうしようっていう不安もすごく言ってくださる。興味は

	あるけれども、実際どうしていったらいいのかということを誰に聞いたらいいのかという方がおられるという印象。情報を伝えても全て理解、活用できるわけではないので、その差を埋めていくのは難しいと感じた。